

藤壺と紫の上：その終焉をめぐって（一）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 玲奈 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4630

藤壺と紫の上

―その終焉をめぐる(一)―

橋本玲奈

一序

『源氏物語』は、五十四帖にもわたる壮大な恋愛小説である。持つて生まれた美しさと、桁外れの才気を持ち合わせた光源氏という超人的な男性の一生が、華麗な王朝絵巻の如く語られる。空想の世界の出来事でありながら、真実味溢れる紫式部の筆づかいに、登場人物の一人一人が、現実が存在していたかのような錯覚を覚える。

このように、『源氏物語』が千年以上の長い年月を経て、今なお読者に感動を与えるのは、物語の背景に色濃く反映された日本の美しい山紫水明の自然や季節感が、その人物描写と絶妙な綾を織り成しているからであろう。

本稿では、まず数多くの女性遍歴を重ねた光源氏を取り巻く女性達の中で、最も光源氏と深く関わる藤壺と紫の上に焦点を当てる。

この二人の女性は、共に理想的な美しさを謳われ、その終焉は季節感と密接して描かれている。その藤壺と紫の上が、どのような位相として描かれ、華やかな一生を閉じるのかを、四季の趣との関連性を通して検証したい。

また、特に『源氏物語』は実際に平安時代に生きた紫式部が生み出した物語であり、そこに描き出された貴族文化を始め、日本の風物、和歌など日本文化の精髓は、まさに平安京に於いて生み出されたものである。従って、検証に当たっては『源氏物語』の時代背景を考慮し、作者の描く心理的側面を重視した上で、藤壺と紫の上に於ける季節との関連性を追求する。そして、藤壺と紫の上の一生を人間的な視点で見直すことで、精神的な変化を振り返り、死と季節感に表現された作者の意図する所を抽出することとする。

本稿で取りあげる巻は、主として賢木、薄雲、若菜上・下、御法(補足として幻も加える)巻である。

理由は次の二点である。まず、賢木巻、及び若菜上・下巻に於ける藤壺、紫の上それぞれの言動が、際立って自己表現に溢れたものと変化していることに着目した。故に、その心的変化を追うことにより、作者の意図と連動した関係にあることが、立証されると考えられるのである。

第二に、二人の死は季節感と如何なる関連性が見られるのかを追う上で、藤壺の死が描かれる薄雲巻と御法巻を分析することが、最も重要であると考えられるからである。

二 賢木巻に於ける藤壺

藤壺は、先帝の四の宮として生まれ、桐壺更衣亡き後、「御容貌人」(桐壺)であったことから入内する。その見目形から「かかやく日の宮」(同)と称された。源氏にとって藤壺は、亡き母への慕情から憧憬の対象へと変化し、そして次第に理想の女性として更に永遠の恋人と謳われるまでに至る。

しかし、人物像に対する表面のきらびやかな形容とは裏腹に、人間的な美像は明らかにされていらない。すなわち、藤壺の美しさ、人間性の評価は、どれをとっても賞賛する言葉の羅列に過ぎず、生身の人間としての表現に於いては具体性に欠け、個性が感じられない。極論すれば、藤壺の人生のうち賛美する表現を除くと、彼女はほとんど一貫して無個性で、おぼろげな人物像のまま登場している。

けれども、その実証性の無さに反比例して、藤壺の行動によって

生み出された物語の中核部分は、次第に物語の展開の中で、重要味を帯びていくのである。

では、何故藤壺はこれほどまでに物語の中核を担いながら、具体的な人物像が描かれていないのであろうか。密通、不義の子出産、出家と、数奇な運命を辿った藤壺の人生を振り返りながら、作者の描いた藤壺像に迫る。

(一) 藤壺の登場

藤壺は、源氏の亡き母桐壺更衣に似た面影を宿していたことから、源氏の父桐壺帝の妃として迎えられる。源氏は亡き母の姿と藤壺を重ね合わせて思慕し、次第に一人の恋愛対象の女性として見るようになる。

だが、藤壺は父の寵妃であり、源氏には生涯手の届かぬ花である。秘めた恋を胸に、源氏は心の隙間を満たすかのように、数多くの女性遍歴を重ねる結果となり、その過程の中で紫の上を探し当て、運命的な出会いを果たした。いわば、藤壺の登場は、紫の上の物語を成立させる為の重要なキーポイントであることが明白である。

藤壺の登場が、物語の中で意図的に配されていると見られる場面を、もう一箇所挙げる事が出来る。冷泉帝の誕生、ひいては源氏の出世の大きな糸口となった出来事である。藤壺が、源氏との不義密通という大罪を犯さなければ、後の源氏の出世はあり得ず、準太政天皇にまで上り詰めることは不可能に近い。桐壺帝が崩御した折

弘徽殿方の右大臣勢力により失脚に追い込まれ、かくもあっさりとは須磨退去という事態に陥ったのは、元を正せば、強力な後見を持たぬ源氏の不安定な立場故である。

源氏は、男女間の恋愛に於いてはその達人ぶりを發揮しているが、殊に政治の駆け引き、その手腕に於いては甚だ未熟であった。父の庇護の下に、自由奔放に生きてきた若い源氏にとって、陰謀渦巻く政局の中を渡り歩くことは、決して楽ではなかったと言えよう。このような源氏の生涯を大きく左右し、多大な影響を与えたのが、藤壺その人なのである。

藤壺によって、源氏と冷泉帝との親子間、紫の上との夫婦間が、次第に強力な結び付きを持つようになる。藤壺自身はその重要な役でありながら、影の立役者として源氏を後押しする立場を貫き、その役目を終えると、いともあっさりと言語から退場するのである。

確かに、後に藤壺物語と称されるほど藤壺の存在は大きいが、作者が紫の上ほど藤壺に重き比重を置いて描いたかどうかという点については、私は甚だ疑問を持たざるを得ない。寧ろ藤壺は、源氏と紫の上に光を当てる為に描かれたものではあるまいか。

なぜなら、源氏にとって藤壺が一世一代の恋の対象であったと仮定するには、あまりにもその人物描写が淡白であり、人間的な描かれ方に物足りなさを感じる。その意味で、藤壺の人間性が、物語の中で最も言い表されているのは、賢木巻での出家以降なのである。

(二) 懊悩する藤壺

藤壺は物語内で短い一生を送るが、その中では彼女が精神的ダメージから見事に脱却し、心理的に成長していく様が描かれる。密通という大罪を犯したことで、人知れず懊悩する藤壺と、盲目的な愛情をぶつける源氏。この男女の間には、大きな心理的溝が生じている。見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうち

やがてまぎるるわが身ともがな(若紫)

世語りに人や伝へむたぐひなく

憂き身をさめぬ夢になしても(同)

これは、藤壺と源氏が、逢瀬を重ねた時に詠み交わした歌である。前者の源氏の歌は、夢にまで見た「まれなる夢」が現実となり、夢とも現実とも思われぬ甘い一夜に酔いしれる様を詠んでいる。

一方の藤壺の歌には、源氏を拒みきれぬ我が身の愚かさ、運命の皮肉、狂った歯車の対処に戸惑い、己の宿命を嘆いてひたすら罪の露頭を恐れる様子が伺える。「心憂く」「若紫」「心憂き身」「(同)「心憂し」(同)などを連呼し、藤壺の心情を綴っているところから、この時点での藤壺は「あさましき御宿世」(同)に言いようもない悲しみを覚えるばかりである。

その藤壺に、新たな心的変化が見られるのは、冷泉帝出産時である。臨月より遙かに遅れての出産は、世間をあらぬ噂で騒がす結果となり、藤壺は罪の露頭に気がでない日々を送る。「憂き身をさ

めぬ夢になして」の如く、現実問題として己の身の消滅を心中密かに願ったことであろう。

命長くもと思はずは心憂けれど、弘徽殿などの、うけはしげにのたまふと聞きしを、むなしく聞きなしたまはましかば人笑はれにやとおぼしつよりてなむ、やうやうすこしづつさはやいたまひける。(紅葉賀)

皇子出産に沸く周囲の喜びとは裏腹に、藤壺は「命長くもと思はずは心憂けれど」と生き長らえた我が身を呪いながらも、ここで「おぼしつよりて」と藤壺の内面的強さが浮かび上がる。帝の寵愛を一身に受ける藤壺であるが、桐壺更衣のような夫の愛情のみに守られ男性に頼る女性とは異なり、嫉妬や権謀術数、怨念渦巻く後宮世界で生き残る為の知性や、精神的強さを合わせて持っている。いわば、藤壺がどんな苦境に立たされても、自らで道を切り開いていくバイタリティを秘めた女性であることを、読者が知る場面である。この精神的強さが、後に源氏や我が子を救い、また自らも中宮として後宮に留まり、政権の一翼を担う存在となっていく支えとなったと言っても過言ではない。

こうして藤壺は、母となることで以前のような源氏との密通の露頭を危惧し、おびえているだけの女性から見事に脱皮した。その後に出家を果たすことになるが、その出家の要因も、この世からの逃避として出家を選ぶ女三の宮とは、大きく異なっている。

そして、桐壺院崩御という、藤壺にとっても源氏にとっても、また紫の上にとっても、人生を大きく変える出来事が起こる。

藤壺は、ライバルである弘徽殿方の勢いが強まり、我が子冷泉の春宮排除という雰囲気が高まりだしたことから、将来への不安に戦く。

しかし、肝心の後見である源氏は、藤壺しか眼中にない。藤壺の眼にちらつくものは、『破滅』の二文字である。

内裏に参りたまはむことは、うひうひしく所狭くおぼしなりて、春宮を見たまつりたまはぬをおぼつかなく思ほえたまふ。またたのもしき人もしたまはねば、ただこの大将の君をぞ、よろづに頼みきこえたまへるに、なおこの憎き御心のやまぬに、ともすれば御胸をつぶしたまひつつ、いささかもけしきを御覧じ知らずなりにしを思ふだに、いと恐ろしきに、今さらにもまた、さる事の聞こえありて、わが身はさるものにて、春宮の御ためにかならずよからぬこと出で来なむとおぼすに、いと恐ろしければ、御祈りをさへせさせて、このこと思ひやませたまつらむと、おぼしいたらぬことなくのがれたまふを(賢木)

息子の将来の安否を不安に思う親心、源氏の執心を回避せんと焦る気持ち、逃れられぬ宿世を嘆く気持ちなど、様々な思いが藤壺の心の中を駆け巡る。

藤壺は、頼りなき女の身で、いつまでも源氏の執拗な手から逃れるものではないことを、ひしひしと感じている。源氏の態度が強引で執拗になるに従い、秘密の露頭も時間の問題となってくる。まして、この密通は他言が絶対に許されず、その意味では女房も信頼が置けない存在である。この醜聞は、藤壺と源氏の身を滅ぼすだけで

なく、息子の身にも一生復帰できないほどの危険を及ぼすものになり兼ねない。藤壺は今や子を持つ母である。そのため、いかなる手段を用いても、我が子を守る親として、責任を果たさなければならぬ。この自覚に目覚め、出家という道を選ぶのである。

こうして、賢木巻に於いて初めて藤壺は確固たる地位を確保し、物語の中核を担うようになる。ただ源氏との色恋だけに花を咲かすのであれば、源氏を巡る他の女性達の一人にしか過ぎなかったであろう。藤壺が、出家という形で現世を離脱し、精神的に自立したことによって、初めて影の立役者としての重い存在感が加わり、藤壺に人間らしい個性が光り始めるのである。

(三) 出家による心的変化

藤壺は春宮の後見として源氏のみを頼みにすると共に、源氏との秘事によって出生した春宮を守り抜く為に、何としても源氏の求愛を退けねばならなかった。すなわち、恋人として生きる自分を断ち、母として生き抜くという二つの理由で、藤壺は出家を決意する。

このような藤壺の出家観は、当世の一般的な出家観とは異なっている。すなわち、自らの宿世を問い、往生を願うものとは異なり、いわば親子の情に突き動かされ、はたまた己の身の破滅から回避することが、主たる理由となっていた。

しかし、理由の如何はともかく、藤壺の思惑通り、出家を境として源氏との関係は途絶えた。これは藤壺と源氏の関係に打たれた終

止符であると同時に、源氏の新たな出発点であるとも言えよう。

さらに藤壺は、日々秘密の露頭を危惧し懊悩していた時と決別し、出家を境に見事なまでに自分の意思を貫く、意思の強い女性として生まれ変わる人きな転機となった。以下に、彼女の自立と新たな決意が伺える本文を示す。

果ての日、わが御ことを決願にて、世を背きたまふよし、仏に申させたまふに、皆人々おどろきたまひぬ。(中略) 心強うおぼし立つさまをのたまひて、果つるほどに、山の座主召して、忌むこと受けたまふべきよしのたまはず。御をぢの横川の僧都近う参りたまひて、御髪おろしたまふほどに、宮の内ゆすりて、ゆゆしう泣きみちたり。何となき老い衰へたる人だに、今はと世を背くほどは、あやしうあはれなるわざを、まして、かねての御けしきにも出だしたまはざりつることなれば、親王もいみじう泣きたまふ。(賢木)

藤壺は、「かねての御けしきにもいだしたまはざりつる」と誰にも内に秘めた決意を語らず、「わが御ことを決願」として、誠に鮮やかなまでの出家を果たしている。藤壺にはもはや頼るべき夫も、もう現世に存在していなかった。唯一心を残すのは我が子のことであるが、その我が子と現世での縁を切つてでも、その行く末を守り通したかったのである。

藤壺は、世間体では桐壺院の一周忌である御八講の席で、夫の後を追って出家をするという体裁を取った。藤壺の真意を知る者は、誰一人としていないが、彼女の人望は兄兵部卿の宮や源氏は勿論のこ

と、下々の者にまで慕われていた為、藤壺の突然の出家に涙せぬ者はいない。若くして深く現世を断つた藤壺の決意が、誠に真剣であったからこそ、人々の感慨は一人であった。また、同時にこの突然の出家は、源氏の目を覚ます契機にもなる。

それまでの源氏は、まさに恋の虜と化していた。次第に高まる感情を制御することが出来ず、強引に逢瀬を迫り、人目も憚らず乗り込む始末であった。自暴自棄に陥つた源氏は藤壺への腹いせに出家すらしかねない有様である。藤壺に恋する源氏は、まるで駄々をこねる子供の様な振る舞いさえ見せる。その源氏が失恋から立ち直り、一人前の男として成長していくことが出来たのは何故であろうか。

その理由の一つには、藤壺が出家によって男女関係に終止符を打つたことにより、新たに紫の上という生涯の伴侶を、心の支えとしたことにある。

また、第二に、冷泉の母たる藤壺が出家を果たした為、事実上我が子である冷泉が後見を一人も持たない窮地に陥り、源氏が我が子を見捨てられない立場に立たされたことも挙げられる。

月のすむ雲居をかけてしたふとも

この世の闇になほやまどはむ(同)

これは、出家を果たした藤壺に、源氏が贈った歌である。出家によって、藤壺を失った悲しみと同時に、源氏自身が予てより出家を望み、藤壺が自分よりも早く、見事に出家を果たした羨望の気持ちが入り乱れている。もはや藤壺は、完全に手の届かぬ人であり、源氏とどうすることも出来ない。最愛の人を失い、共に世を捨てた

くとも、源氏にはまだ現世に紫の上や冷泉という掛け替えない人達がいる。出家をするには、源氏はあまりにも煩惱が多すぎたのである。

こうして、藤壺が永遠に源氏の手の届かぬ存在になったことをはっきりと認識した時点で、初めて源氏は親として、夫として真の意味での自覚を持ったと言えよう。

一方、子を思うが故に源氏を冷たく突き放した藤壺も、心の内は様々な思いに駆られたことであろう。

おほかたの憂きにつけてはいとへども

いつかこの世を背き果つべき(同)

まだ幼い我が子を、どうして見捨てることが出来ようか。たとえ現世を離脱しようとも、「この世」||「子のいる世」への愛着は、断ち切り難い。背水の陣で臨んだ出家は、藤壺が真剣であったからこそ、源氏もまた藤壺への愛執を捨て自立に至った。その意図は、結果的に成功を収めたものの、藤壺自身は、「この世を背き」と仏のみに仕える境地には、到底達していないのである。

現在までの研究では、藤壺の源氏に対する感情については、様々な論争が繰り広げられているが、互いに歌を詠み交わすこの場面に於いては、息子の安泰と現世への執着を捨てきれない心の内しか描かれていない。

従って、藤壺の決意の出家は恋愛感情とはかけ離れたものであり、親としての自覚から行なったものと言えるだろう。そこには、もはや運命に翻弄されるだけの女性ではなく、運命を直視し、自らの手

で変えようとする彼女の強い意志を感じる。藤壺は煩惱への断絶し難い思いを詠むと同時に、源氏に我が子の運命を暗に託す思いを伝えたかったのである。

藤壺は、こうして出家という形で、物語の華やかな場から一歩退いた所で生命の花を咲かせた。彼女には、藤壺物語の女主人公としての一面も見られる。

しかし、物語全体からみると、主役としてよりも源氏に名譽と栄光を与え、明石一族の発展にも陰ながら貢献する布石となり、また、紫の上の一生を大きく変える根源として描かれているのである。その意味で、藤壺は真の『源氏物語』の女主人公には成り得なかったのではなからうか。

確かに、藤壺の存在なくして光源氏の物語は成立し得ない。けれども、三十七歳という若さで早くに物語世界から姿を消すのも、紫の上と比べ、簡潔にその死が描かれることから見ても、藤壺はあくまでも真の主人公の方向性を決定付ける「影」の役割の女性である。故に、藤壺の人物像が、その輝かしい形容とは裏腹に、単調に描かれているのであろうと解釈される。藤壺は、物語の基礎を築き、女主人公紫の上に華やかな舞台を譲り終えた今、もう自らの役目は果たしたのである。

我々は、藤壺という女性が、出家という形で生々しい現世から退いた時、初めてベールに包まれていた人となりを知る。陰謀渦巻く後宮で、中宮として、女院として、強く雄々しく生きる藤壺を見ることによって、確かな人格の手応えを感じ、その姿に感動し、また

欠かすことの出来ない女人の一人として、再確認するのである。

三 薄雲巻に於ける藤壺

藤壺と紫の上は源氏の生涯に大きな影響を与えた女性であった。二人の女性の人物像が暈され、抽象化されていたにも関わらず、物語中に没した数多くの登場人物の中で、その死は非常に印象的に描かれている。

また、二人の生涯は、季節感と密接な関わりを持っており、その死についても四季の描写と深く結び付いている。このような視点から、本章では藤壺の死に表現された意味合いと、四季との関連性について言及してみたい。

(一) 母として生きる藤壺

藤壺は源氏への愛執から逃れ、春宮の安泰を図る為に出家の道を選んだ。御年二十九歳。出家によって女から母へと変容した時点から、藤壺は生き生きとした個性を持ち始める。初めて人間らしい個の姿を見せた賢木巻から、三十七歳で若すぎる死を迎える薄雲巻まで、わずか九年ほどしか、真の意味での藤壺の生涯は語られていない。

藤壺の母性愛で包まれた九年間は、まさに春宮の治世を盛り立てていく為、彼女自らが強い意志を持ち、エネルギーに奮闘し

た時である。濡標巻では、故六条御息所の愛娘「秋好中宮」の入内の強力な後見をなしている。これは、秋好中宮が義父である光源氏という絶大な後見を持っているからこそ、藤壺が我が子の為は何としても取り纏めたかった縁組であったと言えよう。

冷泉帝は帝であるとはいえ、父桐壺帝はもはや他界し、母藤壺は出家の身であり、強力な支援者が必要であった。冷泉帝と源氏は、世間体では主従の關係であるが、実際は実の父が子供を盛り立ていくことになり、冷泉帝の将来は安泰と言えよう。結果的には秋好中宮が入内を果たしたことで、源氏自身も出世を果たす。藤壺が身を挺して守り通した親子の地位の安泰は、藤壺の政治的策略とも言える働きにより見事に功を奏した。

大臣のよろづにおぼし至らぬことなく、公がたの後見はさらに
もいはず、明け暮れにつけて、こまかなる御心ばへの、いとあ
はれに見えたまふを、たのもしきものに思ひきこえたまひて、
(濡標)

ここに、源氏の冷泉帝補佐を喜ぶ藤壺の姿が描かれている。

また、藤壺は自分の健康に不安を抱いていたことから、秋好中宮
の入内を心から安堵する場面もある。

いとあつしくのみおはしませば、参りなどしたまひても、心や
すくさぶらひたまふこともかたきを、すこしおとなびて添ひさ
ぶらはむ御後見は、かならずあるべき、ことなりけり。(同)

この時の藤壺は、御年三十四歳。病弱な我が身に迫り来る死をひ
しひしと感じ、自分の代わりに精神的な支えとなる「すこしおとな

びて添ひさぶらはむ御後見」を妻にと願う母の心境を、仄かに垣間
見ることが出来る。

我々読者は、この藤壺に中宮という政治的に優位な立場を利用し
て、自分の意の儘に冷泉帝を支援する冷静沈着な一面を感じる。

けれども、藤壺にこのような行動をとらしめたものは、藤壺の政
治家としての目覚めでもなければ、源氏恋慕の情でもない。藤壺が
春宮の母として生き始めた時^(注1)、彼女が強い意志と自己表現を申し始
めたことを考慮すれば、春宮の即位に関して藤壺が取った行動は、
子を守る一念によるものと解釈される。

そして、作者は、病がちであるという昨今の様子を、濡標巻で初
めて表記することにより、藤壺の死期が間近いことを読者に匂わせ
る。

また、藤壺が暗にその死を感じ取って、さらに我が子の将来の安
泰を確固たるものにする為、努力を惜しまぬ姿を描くのである。そ
の姿は、絵合巻に端的に表されている。女人達の争いから始まる華
麗な絵合は、政治的な思惑が入り交じったものへと発展する。結果
的に、藤壺等の支援で秋好中宮方、ひいては源氏方が勝利すること
で、公に勢力は源氏方に傾くようになる。

こうして、名実共に源氏が冷泉帝の後見となり、将来の安泰も確
証されると、藤壺は影の支援者としての役割を終えることになる。
物語世界から退く時期を迎えたのである。

(二) 藤壺の位相

薄雲巻では、紫の上の描き方とは異なり、藤壺の死は巻の中で綴られる話のほんの一部としてしか取り扱われていない。藤壺物語とも称され、物語の大筋を担う重要な立場の藤壺が、何故その死が単調な描き方しかされなかったのであろうか。

ここに、私は、作者の登場人物の位置付けが、さほど藤壺を重視していなかった結果故であるという思いに駆られるのである。

確かに、藤壺は源氏の生涯に於いて憧れの対象であり、栄光の道への糧となっている。換言すれば、藤壺は源氏が栄華を獲得するまでの物語の展開に、なくてはならない存在である。

しかし、二人の関係は、将来的にそれ以上の発展を見ることはなかった。賢木巻で藤壺が出家をし、共に冷泉帝の安泰を目標とし、男女の仲を越えた、息子を媒介とする新たな関係を築き上げたことで、完結したと見て良い。

また、源氏には、既に全ての理想を兼ね備えた妻「紫の上」が存在していた。例え、当初は紫の上が藤壺の形代であり、彼女に向けてられる愛情が藤壺への愛情の裏打ちであったとしても、その愛情は明らかに変化を見せている。永遠に得られない藤壺を追い求め続けるよりは、源氏も紫の上との夫婦愛を永続的なものへと育むことに、全力を注ぎ始めている。

故に、物語の構成と展開は必然的に源氏と紫の上を中心に、その

人生が語られていくのであり、藤壺の存在は寧ろ二人の障害でしかなくなると見るべきである。

従って、紫の上が物語の女主人公として、初めから作者が設定していた人物であるとすれば、藤壺が源氏の出世に後見する援助者であり、また藤壺と紫の上が酷似していたことから、紫の上と源氏との出会いを間接的に仲介する役割を担って、登場したとの理由付けが成り立つ。

すなわち、『源氏物語』の真の女主人公と成り得たのは紫の上のみであり、藤壺は源氏の栄華を司る「陽」の象徴として位置付けられ、対比的に第一部で登場する女三の宮は、源氏の没落を司る「陰」の象徴として存在したのではなからうか。

藤壺と女三の宮は、共に不義密通を犯し、その子を成す。理由は異なるが、女としての道を捨て若くして出家を遂げ、物語世界に留まる時間も短いなど、人生の描かれ方に共通性が見られる。

このように、源氏と紫の上を取り巻く二人の有り様は、物語の展開を図る導入部分であると解釈すれば、非常に類似点が多いことが納得される。紫の上が、物語の主流で時めいていく女性であるからこそ、藤壺は女三の宮と同様、短時間で役割を終え姿を消す運命にあると考えられる。藤壺は表向きは重要人物として位置付けられているにも関わらずその死に於いて紫の上より単調に語られている点も、藤壺の登場人物としての役割を考えれば、説明がつく。

以上の点から、「紫のゆかり」を巡る一連の源氏の女性遍歴の中で、中核を担う三人の女性達の相関関係は、以上に述べたようなも

のではないかと、私は考えるのである。

(三) 藤壺死去

藤壺の死は、太政大臣薨去から始まる相次ぐ天の異象で語られる。薄標巻で、漠然と迫り来る死を予感していた藤壺も、今では「今年はかならずのがるまじき年と思ひたまへつれ」(薄雲)と、はっきりと死期を悟っていたことを口にしてゐる。死を目前にして、藤壺は自分の人生を振り返る。

御心のうちにおぼし続けるに、高き宿世、世の栄も並ぶ人なく、心のうちに飽かず思ふことも人にまさりける身とおぼし知らる。上の、夢のうちにも、かかる事の心を知らせたまはぬを、さすかに心苦しう見たてまつりたまひて、これのみぞ、うしろめたくむすばほれたることにおぼし置かるべきこちしたまひける。

(薄雲)

藤壺は、先帝の四の宮として生まれ、国母、女院にまで上り詰め、「高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく」と自負する類い稀な人生を送った。

しかし、また「心のうちに飽かず思ふこと」という思いに苛まれ続けた人生でもあった。死と隣り合わせの今、心残り是我が子のことである。罪の子であるが故に、我が子に真相を明かすことは出来ない。実の父である源氏に子が礼節を怠る結果となり、母である藤壺は、相次ぐ天変地異のこともあって心中穏やかではない。多くの

思いを胸に秘めたまま、藤壺は「燈などの消え入るやうにて」(同)御簾越しに隔てた源氏の見守る中、他界した。

以下は、藤壺崩御後の一節である。

○ 殿上人など、なべてひとつ色に黒みわたりて、もの栄えなき春の暮れなり。(同)

○ 夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが、鈍色なるを、(中略) いともあはれにおぼさる。(同)

季節は春。草木萌え出づる春が、藤壺の死によって、人々は喪の色に身を窶し、薄雲は喪服色に染まり、明るい季節に深い悲しみの影を落としている。まして、源氏の悲しみは一入である。

ふかくさののべの桜し心あらはことしばかりはすみぞめに(注3)きけ
(古今和歌集卷第十六哀傷歌、かむつけのみねを)

入り日さす峰にたなびく薄雲は

もの思う袖に色やまがへる(薄雲)

二首共に、源氏の心境を見事に表した歌であると言えよう。死者追悼の為に、「墨染に咲け」と源氏の思いの丈を綴った前者の歌と、何を見ても何を聞いても感慨深い哀傷の意を込めて詠った後者の歌と、藤壺は源氏に深い傷を負わせて消えていったことが伺える。

藤壺の仁慈が人々に愛され、「をさめたてまつるにも、世の中響きて、悲しと思はぬ人なし」(同)と、その崩御に涙せぬ者はいなかったという最大の賛辞で、藤壺は死してその人物像に焦点を当て

られている。出家と死によって、藤壺の人間性が語られている点も非常に興味深い。

(四) 藤壺の死と春との関連性

さて、ここで藤壺が、何故春にその生涯を閉じたかという点について、検証してみたい。

生前の藤壺は、宮、母宮、入道の宮と、その呼称から見ても春を連想させる女性ではない。寧ろ、桜に例えられ、春のおとど、春の御まへ、春の上などと称されたことから、まさらに春の女主人と呼ぶに相応しいのは「紫の上」である。

しかし紫の上は、春とは対照的な秋に生涯を閉じている。私は、この二人の死が、作者によって意図的に春秋に設定されたものではないかと考える。

前に、『源氏物語』の女主人公は紫の上であり、藤壺は影の支援者としての役割を担う人物であると述べた。藤壺の死によって、源氏と紫の上は共にその存在が強固なものとなっている。源氏の栄華への道の幕開け、紫の上の藤壺の影としての存在からの脱皮により、二人は真の物語の主人公として相応しい立場を確立する。主人公達の人生史の幕開けの象徴、それが藤壺の死であると言っても過言ではない。春に命を閉じたということは、それはつまり、春の象徴である紫の上の登場を、指し示すものではなからうか。

そして、薄雲巻での藤壺の死後、夜居の僧都による密奏により、

冷泉帝が源氏を実の父と知ること、後に源氏は准太政大臣という確固たる地位を手に入れ、栄華を極めることとなる。

藤壺の死が礎となり、この世の栄華を一身に集める源氏と紫の上。春という一年の始まりの季節に、真の女主人公たる紫の上に確かな主導権を手渡した藤壺は、己の役割を見事に果たし、新たな世界の到来を呼び掛けたのである。

四 若菜上・下巻に於ける紫の上

『源氏物語』に登場する女性のうち、最も理想的な美を謳われ、超人的存在として扱われる女性は、紫の上である。全てに於いて完璧さを称えられる紫の上であるが、真に彼女の形象性と実像が浮かび上がるのは、深沢三千男氏が指摘するように、^(注4)晩年の若菜上・下巻に於いてである。

確かに、物語の中に位置付けられた紫の上の人間性を理解しようとすればするほど、若菜巻以前の紫の上は、「紫のゆかり」としてのイメージが強く、また、全てを兼ね備えた女性像として、理想化されている感が強い。嫉妬心を露わにする人間味溢れた片鱗も見え隠れするその表現とて、紫の上の表層を彩る断片でしかない。一人の人間としての紫の上の実像が表面化するのには、女三の宮降嫁による悲劇の幕が降ろされたからのことである。

すなわち、紫の上の虚実が、劇的な変化を見せるのは若菜巻以降であり、その流れを検証することが、紫の上の人間性追求の為の重

要過程であると思われる。

そこで、非現実的な存在であった紫の上が、どのように物語世界の中に思つき、成長していったかに焦点を当て、それらの事柄を若菜上・下巻で、順に追いながら検証してみたい。

(一) 女三の宮降嫁事件

第二部の核ともなるべき女三の宮の登場は、華やかさの象徴そのものであった源氏の人生に、暗い影を落とす幕開けとなった。暗雲は紫の上の人生をも覆い隠す。若菜巻以前では、事実上源氏の正妻としての座を築いてきたかに見えた紫の上も、女三の宮降嫁という事件を契機に、女王の座を譲り渡さねばならない立場に置かれる。

この事件は、紫の上が長年培ってきた源氏との愛情や信頼関係を根底から揺るがし、ひいては六条院崩壊へのシナリオの伏線となる。

また、源氏は仏教の説く因果応報とも言うべき苦悩を、女三の宮によって体感することになるのである。作者の意図により、源氏は女三の宮と柏木の密通から、過去に犯した罪の報いを受けることとなった。本文には、その源氏が自らの手で崩壊の幕を引くまでに至る文脈の運びが、見事に描き出されている。

「中納言の朝臣、まめやかなるかたは、いとよくつかうまつりぬべくはべるを、何ごともまだ浅くて、たどり少なくこそはべらめ。かたじけなくとも、深き心にて後見きこえさせはべらむに、おはします御蔭ことやはべらむと、疑はしきかたのみなむ、

心苦しくはべるべき」と、うけひき申したまひつ。(若菜上)

これは、源氏が、女三の宮との結婚を承諾した時の返事である。朱雀院が、源氏の息子である夕霧を婿にと望んだにも関わらず、源氏は、「何ごともまだ浅くて、たどり少なくこそはべらめ」と夕霧の頼り無さを挙げ、我こそが女三の宮に相応しいと言いつ切っている。この時点に於ける源氏は、未だに己が絶頂期にあると信じて疑わない。それは、源氏が結婚を承諾した理由(注5)を考察してみれば、明白である。

まず、理由の第一に、兄朱雀院のたつての願いによることが挙げられる。また、源氏自身も自分こそが女三の宮に相応いしとする自負心を持っていることが、本文から垣間見える。

第二に、女三の宮の母である藤壺女御が藤壺中宮の異母姉妹に当たり、女三の宮が「紫のゆかり」の人であることが考えられる。権力を手中にした人の常である。飽くなき欲望への執着心の表れと言えよう。

そして、第三に、女三の宮の贈与された財産獲得を目的としたことが挙げられる。通い婚であった平安時代の結婚生活では、(女三の宮の場合は、源氏の下に降嫁)妻の絶大な後見の如何によって、男の出世が左右されていた。従って、そのことを考慮すれば源氏の心の底に出世欲、ひいては金銭欲が全くなかったとしたら誠に不自然である。飛躍的な出世の階段を上り詰めた源氏であるが、正妻がないことが唯一と言うべき彼の汚点である。世間の誰もが認める有力な子女を手中にして初めて、源氏は並ぶ者のない天下人となる

のである。

以上の点から考察すると、極めて人間臭い様々な衝動に駆られて、女三の宮との結婚を承諾した源氏の人間性が見えてくる。絶頂期の源氏には恐れるものは何もない。己の欲する物は何であろうと手にすることが出来る地位にいる。この時点での源氏は、紫の上に対する裏切りに気付きもせず、その後起こる深刻な事態にも思い至ることはなかったのである。

こうして、安易な承諾をしてから、源氏は突如我に帰り、己の浅はかさに気付く。同時に、今や六条院の正妻とも言うべき地位に君臨していた紫の上は、正妻格の座から失墜するという、思いも寄らない苦悩を舐めることになるのである。

紫の上が、源氏の正妻であるか否かについては論があるが、ここではその是非を問わず、事実上正妻格の扱いを受け、紫の上本人もそのことを自負していたという事実に加えて、論を進める。

輝かしい栄華の道を歩んできた紫の上は、一夜にして精神的苦悩の道を進むことになって、初めて紫の上の人間性が露わにされてくる。理想的な女性として、賛美の言葉のみを与えられ抽象化されてきた紫の上は、藤壺と同様、危機に直面した後、その人間性と精神的成長の軌跡を描かれることになるのである。

(二) 紫の上の絶望

本節では、本文を引用しながら、紫の上の人間性を追う。

まず、源氏の女三の宮との結婚承諾が、紫の上にとっては、まさに青天の霹靂であったことを同わせる部分を抽出すると、

紫の上も、かかる御定めなど、かねてまほの聞きたまひけれど、さしもあらじ、前斎院をもねむごろに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしもおぼしとげずなりにしを、などおぼして、さることやある、とも問ひきこえたまはず、何心もなくしておはするに(若菜上)

とあり、それまで、紫の上の源氏に対する信頼は、絶対的に等しいほどの、疑いようのないものであったことが理解される。無論、源氏の度重なる女性遍歴により、紫の上が何度となく夫の浮気心に苦しめられ、己の身の不安定さを嘆いていたことも事実である。

けれども、長年連れ添ってきたという安心感から、よもや二人の間に波紋を起こすようなことはあるまいと、紫の上は信じていた。

思わぬ源氏の裏切りに、遂に紫の上の源氏への信頼の糸は途切れる。源氏は、己の不甲斐なさから招いた事態に自責し、誠に言い訳がましく言い繕うが、源氏の予想に反して、紫の上からは思いも掛けない反応が返ってくる。

いとつれなくて、「あはれなる御ゆづりにこそはあなれ。ここには、いかなる心をおきたてまつるべきにか。めざましくかくてなど咎めらるまじくは、心やすくてもはべむなを、かの母女御の御方ざまにても、うとからずおぼし数まへてむや」と卑下したまふを(同)

第一部の紫の上は、随所に嫉妬心を露わにする姿が見られる。理

想的な女性像が見せる唯一の人間らしい欠点である。

しかし、第二部に見られるこの紫の上は、引用からも読み取れるように、劇的な変化を見せている。「いとつれなくて」と源氏を責めるでもなく、さりとして感情を露わにして泣き崩れることもなく、己の信頼を踏みじった源氏の行動に対して意に介さない様子を見せる。この変化をどのように捉えたら良いのであろうか。

紫の上が、第二部で女性の理想像と理想美を全うした完璧な人間へと、進化を遂げたと解釈すべきなのであろうか。断じてそうではない。言葉や態度にはその真情を露わにしないものの、決して紫の上の心中が穏やかではないことは、以下の本文から明らかになる。

心のうちにも、かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれたまひがたきを、憎げにも聞こえなさじ。わが心に憚りたまひ、いさむることに従ひたまふべき、おのがどちの心よりおこれる懸想にもあらず、せかるべきかたなきものから、をこがましく思ひむすばほるさま、世人に漏り聞こえじ(中略)今はさりともとのみ、わが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむことを、下には思ひ続けたまへど、いとおいらかにのみもてなしたまへり。(同)

もはや紫の上は、己の身に降り掛かる出来事に対し、「のがれたまひがたき」と認識し、ひたすら享受する道しか残されていないことを感じている。深沢三千男氏は、この解釈について、

聡明な紫の上は一瞬にしてこの事態は真に宿命的なものであつて、嫉妬といった人間的な感情の出るべき(幕)ではない事を

悟ったのであった。(注。)

と述べている。紫の上の人格をも理想的な姿で捉えており、女三の宮降嫁を運命的に悟ったとする点が興味深い。

また、深沢氏は、紫の上の劇的な心的変化について、

(前略) さりげなくもてなす表面と苦悶する内面の世界とは全く分離され、わが最愛の夫に対してもその内面をさらけ出す事ができなくなり、気持ちの上で隔てを置いて接しなければならぬ苦しい演技が始まったのだ。(注。)

と評している。当時の女性が、家を主体として生活し、女性の方から男性の下へ通うことなどは考え難い時代であつて、紫の上が抱いた感情は多くの貴族の女性達が共有化する感情であつたと言つても過言ではない。紫の上は、人間の持つ煩惱に悩まされながらも、誰にも弱音を吐くことを潔しとせず、精神的に強く雄々しく生きてゆくこうとしているのである。

その意味で、紫の上には安住の地は許されていない。三十二歳という年は、当時の年齢から見れば、もはや盛りを過ぎている。「老い」によって、はからずも露呈し始めた悲劇は、運命的な光を帯びて源氏のみならず紫の上もまた巻き込んでいく。

そして、同時に作者は第二部に於いて、宿世を身をもって論じる者として宿命を、彼らに義務付ける。すなわち、作者は紫の上を悲劇の渦中に放り込むことで、初めて女主人公に息を吹き込み、苦悩する心情を通して、その人生を語る術を与えたのである。

(三) 運命を享受する紫の上

若き女三の宮の登場は、紫の上の地位を揺るがすと共に、紫の上
に大きな心的変化をもたらした。

一方で、女三の宮の降嫁後も、源氏の紫の上に対する愛情は、何
ら変わることはなかった。寧ろ、より一層思いは募り増すばかりで
あったと言えよう。

しかし、最も信頼していた人からの裏切り行為により、それまで
の人生を一瞬にして否定されてしまった紫の上には、もはや昔の源
氏に対する熱い思いはない。逆に、利発でしかもプライドが高いが
故に、紫の上の心は完膚なきまでに引き裂かれている。その苦しい
心を押し隠し、けなげにも六条院の女主人として君臨してきた妻の
意地を、貫き通そうとする気力のみが紫の上の心身を支えていた。

紫の上は、自らに与えられた運命を享受し従おうとするものの、
一方で源氏の背信行為を許すことの出来ないジレンマに陥る。源氏
の変わらぬ愛情を感じつつも、紫の上は、己の苦悩がその愛情では
救われないことを悟るのである。

目に近くうつればかはる世の中を
行く末遠く頼みけるかな(若菜上)

紫の上が詠んだ歌には、信頼する源氏の唐突な裏切りを目の当た
りにし、己の人生を託すことへの迷いと運命を悟り、源氏との決別
を図ろうとする思いが込められている。

こうして、紫の上は次第に男女間の有り様よりも、全く異なる次
元、すなわち魂の安らぎを得たいとの思いを強くするのである。

しかし、現実問題として、紫の上は現世での生存競争に、日々奔
走せねばならない立場にあった。なぜなら、女三の宮の降嫁は紫の
上の置かれた立場を微妙なものにしていったからである。

故に、紫の上は六条院世界の平和と秩序を守ることが自らの使命
であるかの如く奔走し、己に課せられた宿命に対しては静かに受容し
ていくのである。

ここで、紫の上が、何故六条院の現実的な問題に心血を注がなけ
ればならなかったか、その理由について述べたい。

紫の上には、生涯出家の道は許されていない。現世との隔絶を果
たすことが出来ないのであれば、当然現世での地位安泰を図らねば
ならない。

しかし、紫の上は、当時の貴族社会に於ける夫婦関係の有り方か
ら見ると、非常に不安定な立場であることが伺える。

この点について、藤本勝義氏は、紫の上が「不生女」であるが故
に正妻の地位を追われる結果になったという説(注)を述べている。一夫
多妻制の当時は、後継者、特に子女に於いては家門繁栄の為の手段
として利用されることが常であった。従って多産は美德と称えられ
る一方で、子を産むことの出来ない妻はいわば欠陥と見做された。

明石の上のように子を産んで一門を繁栄させた女性とは対照的に、
紫の上は子も産めず愛情を縁に生きることしか出来ない、弱い存在
なのである。まして紫の上は、はかばしき後見もなく、正式な結婚

も踏んではいけない。すなわち、年若く高貴な血筋であり、強力な後見と子を持つ女三の宮に立ち向かうには、貞淑な妻を演じ切る道しが残されていなかったと解釈される。

しかし、自分を無理に奮い立たせ、気丈に振る舞えば振る舞うほど、紫の上は精神的にも肉体的にも大きな痛手を受けることとなる。紫の上の努力の甲斐あって、一見夫婦仲も睦まじく、悲劇の影すら感じさせない幸福そうに見える六条院世界も、女三の宮降嫁事件を契機に徐々に崩壊の道を歩み始めるのである。

(四) 紫の上の出家願望

紫の上は、生涯出家も叶わず、源氏の愛欲、ひいては紫の上の源氏に対する愛着からも脱却できぬまま、その命を閉じた。

作者は、愛情一筋に生きた紫の上を、単なる不安定な立場からの現実逃避や、醜い嫉妬心からの救済の為に出家させるようなことはしなかった。その理由を述べるには、まず『源氏物語』で描かれる出家や、作者の持つ出家観について触れ、物語でどのように反映されているかを検証する必要がある。

『源氏物語』に於ける女人の出家は、様々な理由付けを持って行なわれる。己の罪障消滅や極楽往生への願い、亡き人の追善供養や子孫への功德の回向といったものである。阿部俊子氏は、『源氏物語』に描かれる女性の出家人道について、

女人は罪障が深く成仏し難いとする当時の仏教界の考えを、紫

式部は否定してはいないと思われる。彼女は、女人の罪障は女人が愛執の念がつよいから生ずるものと考えているようである。それは女性は生命の萌芽を自らの体内で血潮をもってはぐくむという本体なので、全き愛の執念から離れ得ない故とみとめているようである。^(注9)

と提唱しており、女人性悪説を肯定する立場を取っている。

また、阿部氏は、『紫式部集』に収められている「なき人にかごとをかけてわづらふもおのが心の鬼にやはあらぬ」を引用し、

結局己が身や心を苦しめさいなむものは罪も業苦も「おのが心」を払い得なければ煩惱を去って心平安に救われるものではないかと考えていると見ているのではなからうか。^(注10)

と述べており、紫式部の理念が『源氏物語』の中に投影されているとする理論を展開している。

すなわち、紫式部は出家に対する信念の尊さを説き、安易な出家を果たしても往生は遂げることが出来ないことを、登場人物を通して述べているのである。このことは、式部自身が、誦経生活への強い願いを持ちながら、出家を躊躇し、悩み苦しんだであろうことを、『紫式部日記』から伺い知ることが出来る。

いかに、いまは言忌みしはべらじ。人、といふともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく経をならひはべらむ。世のいと、はしきことは、すべて露ばかり心もとまらずなりにはべれば、聖にならむに、懈怠すべうもはべらず。ただひたみにそむき

ても、雲に乗らぬほどのたゆたふべきやうなむはべるべかなる。それにやすらひはべるなり。(中略) いまはただ、かかるかたのことをぞ思ひたまふる。それ、罪ふかき人は、またかならずしもかなひはべらじ。さきの世知なることのみおほうはべれば、よろづにつけてぞ悲しくはべる^(注1)。

出家生活に徹し切れないのは、人間の業の深さ故である。特に、親子や夫婦間といった愛執が断ち難いことを、誰よりも痛感していたのは、紫式部自身ではあるまいか。その意味で、夫婦生活に悩み煩惱を断つことに苦しんだ紫式部自身の思いが、物語内、特に紫の上に反映されていると言っても過言ではあるまい。

以上のことから、現世に未練を残したまま、出家をする紫の上に一石を投じ、生きて解脱の境地を見出す道を与えたものである。

物語の中では、出家をしたくともその思いが果たせない紫の上の苦悩が、様々な場面で語られている。紫の上は、再三に渡って源氏に出家の願いを打ち明けているが、紫の上の出家に対する思いは、徐々に変化を見せ始める。以下に、紫の上が出家を願い出る場面を順に追いその心的変化を探る。

「今は、かうおほぞうの住ひならで、のどやかに行ひをもとなむと思ふ。この世はかばかりと、見果てつるこちする齡にもなりにけり。さりぬべきさまにおぼしゆるしてよ」(右菜下)

紫の上の最初の出家嘆願は、住吉詣の直前の時である。本文の引用から、紫の上が、最初は漠然として厭世的な思いで出家を願っていることが伺える。強力な後見を持つ若い女三の宮に対し、「こ

の世はかばかりと、見果てつるこちする齡」になった紫の上には、もはや源氏の愛を独占出来る力はない。不安定な立場で、源氏の愛を縁に生きていく気力もない。

しかし、ここで注目すべきは、紫の上が源氏を忌み嫌ってはいない点である。源氏が出家を許さないことはうらめしいと思うが、今はただ、源氏への拭い去ることの出来ない不信心と、この世の男女の關係やしがりみから沸き出た倦怠感からの開放を求めて、紫の上は出家の道へと急ぐのである。

けれども、結果的には、紫の上の源氏への愛着、そして源氏の執拗な紫の上への愛欲が、紫の上を終生現世に留め置くことになったと言えよう。

次に紫の上が出家の意向を漏らすのは、紫の上が三十七歳、重厄の年のことである。源氏は、紫の上を話し相手に、自分の半生を回顧する。生まれも育ちも格別で、現在の榮華を手中にすることが出来たのは、世にも稀なことであると自負する。また一方で、苦勞も人一倍味わったと嘆く。

それに対し、紫の上には入内の苦勞も知らずに、源氏の庇護の下で、何不自由なく暮らしてきたことへの恩恵を求める。紫の上の苦悩を十分に知り尽くしている立場にありながら、紫の上を理想の女性へと育て上げた己の自惚れが、源氏の言動を豪胆なものに変えていた。

そして、何よりも源氏の言葉の裏には、徐々に高まりつつある女三の宮に対する思いも、重なっていると言えらるだろう。周囲から見

れば、皮肉極まりない言葉を紫の上に対して投げ掛ける当の源氏には、紫の上の本当の悲しみは理解出来ていない。そればかりか紫の上の苦悩が、どれほど心身を蝕んでいるかすら、察することが出来ないのである。その身勝手な源氏に対し、紫の上は、

ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける (同)

と、皮肉まじりの言葉を返している。源氏の「人にすぐれたりける宿世とはおぼし知るや」(同)という余りの言い様に、誇り高き紫の上はひどく傷つけられている。確かに、紫の上は宮家の庶子であり、孤児同然の身を源氏によって救われ妻にまで迎えられた。従って、「ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえ」に対して源氏に感謝もし、また己の運命に満足もしている。

また、己の身分から、いずれは他人に追い越されるであろうことも、紫の上は十分に自覚していたはずである。

だが、紫の上にとって彼女の人生は源氏そのものであり、源氏以外の異性、源氏が教え導いてくれた世界以外は、全く知る術もない無垢な存在なのである。源氏によって投げ掛けられた言葉は、凶らずも、男女の愛情ほど脆く壊れやすいものはないことを、紫の上に知らしめる結果となった。この時の紫の上と源氏の間には、大きな心の隔絶が出来てしまっている。

さらに、追い打ちを掛けるかのように、紫の上は周囲から取り残されていく。

まず、継子である明石の姫の立后である。子供を持ってぬ紫の上ではあったが、明石の姫を引き取り、見事な貴婦人へと教育することで、世間体からも母として遇されるまでになり、正妻に等しい地位を保ち続けことが出来た。

しかし、明石の姫が立后した今、主導権は明石の上が握るようになり、紫の上は陰ながら見守る存在でしかなかった。

また、六条院での女楽では、源氏自らが女三の宮に琴の秘曲を伝授するという異例の出来事があり、また次第に夜離れも増えるなど、源氏の関心が年若い妻へと移り変わる感すら見え始めてきている。

紫の上には、もはや自分の権威を保つ為の象徴であった明石の姫も、かつて源氏を魅了した若さも情熱も持ち合わせてはいない。日増しに募る己の立場の危機感、自分を奮い立たせていくことへの気疲れの中で、紫の上は自分の命の灯火が、あとわずかであることを察知する。

「まめやかに、いと行く先少なきこちするを、今年もかく知らず顔にて過ぐすは、いとうしろめたくこそ。さきざきも聞こゆること、いかで御ゆるしあらば」と聞こえたまふ。(同)

厭世的な思いから、出家を迫っていた紫の上は、次第に己の寿命を認識し来世への救いを求める為に、出家を願うという心的変化を見せている。

しかし、愛欲の世界に身を投じたままの源氏には、どうしても紫の上の出家を許すことが出来ない。紫の上が心の救いを求めてもがけばもがくほど、源氏はあらゆる手段を講じて阻止しようと試みる。

飽くまでも、返事の承諾を得てから出家を果たそうとする紫の上に残された道は、己の運命を凝視し、終焉の時を静かに待つより他なかった。

こうして、紫の上は、心の救いを得られぬまま、徐々に精神的にも肉体的にも追い詰められ発病へと至るのである。

(五) 紫の上の発病、絶命から蘇生へ

紫の上は、六条院での女樂が催された次の夜の明け方に、突如として発病する。主な原因は度重なる心労によるものというのが通説である。

一方、河内山清彦氏が指摘しているように^(注12)紫の上の年齢が、当時の女性の寿命に達しており、死に至る病に罹ったとしても、決して不自然ではない年齢であることから、厄年故の病と想定する説も、一応納得させるものがある。

しかし、病に至った紫の上の心情を考慮すれば、発病の引き金となったものは、やはり女三の宮の降嫁による、精神的・肉体的疲労困憊によるところが大きいとする方が自然である。従って、本稿では通説に従って考察することにした。

こうして、紫の上は遂に力尽き病に倒れたが、作者は若菜下巻では、紫の上をこの類稀な物語の筋から排除しようとはしなかった。

発病から蘇生、そして永遠の眠りまでをじっくりと歳月を掛け、実に丹念に描いている。

そして、紫の上が次々と周囲の縁を無くし、内面を崩壊させていったように、『源氏物語』の主人公である光源氏をも、同じ境遇に立たせ悟りの境地を見出させるのである。

以上の点から、作者は、世の無常の世界を物語の中で表現し、「あはれ」の境地を主人公達の姿に投影させていると言える。

源氏と紫の上は、共に己の人生の栄華に酔いしれ、その普遍性を信じて疑わない時代があった。

しかし、数多くの死や背信行為、人の気持ちの移ろいを目の当たりにして、仲睦まじい夫婦の間にも、崩壊の時が訪れることを知り、世の無情に救いようのない苦しみを味わうことになるのである。

紫の上は、絶望的な境地から救われぬまま、我が身の寄るべなきを嘆き、六条御息所の物の怪に取り付かれて、突如発病し、絶命する。六条御息所の物の怪が出現したことについて、小西甚一氏は、

紫上においては、むしろ嫉妬を押し隠す苦悩がおもに描写され、嫉妬そのものがいかに凄惨な業苦であるかは、六条御息所を通じて示される。つまり、紫上の内心における嫉妬は、いちど六条御息所に投影され、間接的に推察されるような書きかたになっているのである。歿後十八年ほど経ってから、六条御息所の死霊がまたもや現れるのは、そのような意味あいだろうと思われる。^(注13)

という見解を述べている。

確かに、六条御息所の死後十八年間は、平穏であったものが、突然紫の上を死に至らしめるだけに死霊として登場するのは、いささ

か尋常さに欠ける。寧ろ、紫の上が自分でも気づかぬほど、女三の宮の降嫁に大きな打撃を受け、醜い嫉妬心に駆られた心の内と物の怪の思いが、呼応したと考えるべきではなからうか。

紫の上は、理想的な女人像として、終始一貫してその美を称えられてきた。超越する紫の上の美德は、欠点のないほぼ完璧な人間として描かれている。

しかし、今までに見てきた通り、紫の上に不幸が降り懸かってから、嫉妬心や猜疑心、絶望的な境地など、人間の誰もが心の内に秘めている心境を吐露している。

このように、物の怪の出現は、人間の業の深さを読者に知らしめると共に、紫の上の意外な一面を暴露する。読者は、人間として懊悩する紫の上に憐憫の情を抱き、同時に生身の人間であったことに安堵感を覚え、殊更人間紫の上に心惹かれるのである。

こうして、紫の上は、理想的な人間像として描かれながらも、一方で、やはり人間の一番醜い心を合わせ持つ女性として、詳細に描かれている点が、大変興味深い。作者は、敢えてその欠点を指摘し、細かく描写することにより、人間味溢れる人物像を創造することに成功した。なぜなら、その欠点を克服しつつ、より一層理想的な死を迎えることで、紫の上の理想美の追求が果たされるからである。

(注1) 同様の考えを鈴木日出男氏が、「藤壺はなぜどのような姿貌したのか」(『国文学解釈と教材の研究』昭和五十五年五

月・一一四頁)に述べている。

(注2) 同様の考えを姥澤隆司氏が、「八宿世の罪のゆくえ―薄雲巻の光源氏と冷泉帝―」(『研究講座 源氏物語の視界2 光源氏と宿世論』新典社・王朝物語研究会編・二〇二頁)に述べている。

(注3) 和歌の引用はすべて『新編国歌大観』に拠った。

(注4) 『源氏物語の形成』(二〇六頁)

(注5) 源氏が女三の宮との結婚を承諾した三つの理由付けは、林田孝和氏が『源氏物語の精神史研究』(一七七頁)に述べている。

(注6) 注4参照(二〇六頁)

(注7) 注4参照(二四九頁)

(注8) 『源氏物語の想像力』一九三―二一六頁)

(注9) 「女性の出家入道―源氏物語にみる―」(風間書房)・『源氏物語の探究』第八輯・二二六頁)

(注10) 注9参照(二〇九頁)

(注11) 『新潮日本古典集成 紫式部日記 紫式部集』(九八―九九頁)

(注12) 「紫上の晩年(上)―女性哀史的発想を排す―」(青山学院女子短大紀要一昭和四十六年十一月・二〇頁)

(注13) 「苦の世界の人たち―源氏物語第二部の人物像―」(『言語と文芸』昭和四十三年十一月・九―一〇頁)

(付) 本文引用は『新潮日本古典集成』に拠った。